臨床報告

治打撲一方の圧痛点

高木 嘉子

Trigger Acupoint of Jidabokuippou

Yoshiko TAKAGI

M. D., Practitioner, 1-22-24, Iguchi, Mitaka-shi, Tokyo 181, Japan

Summary Shuan kagawa has been known as the pioneer who initially used Jidabokuippou as an effective Kampo medicine for treating contusion, sprain and other pains. According to his report, Jidabokuippou is mainly used for the treatment of sub acute or chronic bruise.

Recently Jidabokuippou has popularly been used for the bruise, however the effectiveness of Jidabokuippou on physical signs has not yet been reported.

In 18 patients with the history of bruise and pains, the condition and physical signs were examined before and after treatment of Jidabokuippou. All cases had showed the abdominal tenderness at the right side of paraumbilical site before treatment. After the treatment, both of the complain of pain and the abdominal tenderness were disappeared simultaneously in all cases.

Jidabokuippou is proved to be effective for alleviating the pain from the bruise and the abdominal tenderness at the right of paraumbilical site.

Nihon Toyo Igaku Zasshi (Japanese Journal of Oriental Medicine), **45**, 541-545, 1995
(accepted Jan 11, 1994)

緒 言

四肢の痛み、関節痛、腰痛等を訴えて来院し、既往歴に打撲、ギックリ腰、脱臼などがあるものに、臍右横1～2横指附近の放散する圧痛¹⁾と抵抗を目標に、治打撲一方を投与して症状の改善または軽減とともに、圧痛と抵抗の消失あるいは軽減を認めた。

方 法

対象：平成2年3月から平成5年3月までの当院通院患者18名（男1名、女17名）を対象とした。

方法：何らかの痛みを訴え、既往歴に打撲、捻挫、ギックリ腰、脱臼等のあるものに、治打撲一方を煎剤またはエキス剤で投与し、冷えのあるものや既往の古いものには附子を加えた。圧痛の判定は、表1の如く定めた。

結 果

表2に示す如く、18例に検討を加えてみた。いずれの症例にも、図1の如き臍右横1～2横指辺りに抵抗と放散する圧痛を認めた。他の臍傍圧痛は認められなかった。また、あったとしても、痛みの強さはほんのわずかで、比較にならないものであった。

打撲歴1年以内のものは(症例1, 5, 8, 9, 10, 18), 打撲部位と痛みの部位がほぼ一致していたが, 古いもの(症例3, 4, 12, 16)では, 一致するものもあるが, 打撲部位以外にも疼痛を訴えていた。

症状の消退は, 圧痛の消退日数より早いものあるいは同じ日数かかったものと種々であり, 既往の古いものでも, 治癒に要した日数が7日と少ない(症例4, 16)ものもあり, 症例3の如く, 112日と日数の多かったものもあり, まちまちであった。既往の新しいものでは, 症状, 圧痛ともに消退するまでの日数が7~14日のもの(症例1, 5, 8)であるが, 症例10の如く, 98日と要したものもあった。しかし既往1年未満のものでは, 症状消退までの日数は, 平均25.2日, 圧痛消退まで平均29.6日。1年以上経過しているものでは症状消退まで平均44.5日, 圧痛消退まで平均53.9日であった。

症 例

症例1: 54歳 女 写真屋

初 診: [黒塗り]

主 訴: 左膝の痛み

現病歴: 小学生の遠足の山登りに同行しての下山道で左膝がガクッとなり, 帰宅後, 接骨院で2回治療を受け腫れることなくすませた。2ヵ月後, 冷房の効いたホテルで3時間仕事し帰る頃, 左膝に痛みが走り, 翌日より整形外科受診。レントゲン写真に異常なく, 3週間治療を受け一進一退。中国針を2回受けても効果なし。さらに2ヵ月後, 冷房の効いた列車に乗り膝の痛みが強くなったと来院。

来院時所見: 体格や肥満, 脈候弦, 舌は湿った白苔軽度, 腹力中等度よりやや軟, 腹直筋緊張左右(+), 臍上悸(+), 臍右2横指に圧痛(+).

経 過: 治打撲一方加附子1g(煎剤)を投与。2日間ぐっすり眠れ, 痛みは8割方とれ, 3日目より薬がまずかったが続服し, 腹や眼に力が入った感じがし, 7日目には膝の痛みは全くなく, 臍右横2横指の圧痛(±)となっていた。

症例2: 69歳 女

表1 治打撲一方圧痛の判定基準

冊	触れただけで痛がり, 足を縮めるもの。
冊	触れて按じはじめるだけで痛がり, 顔をしかめるもの。
冊	軽く按じて痛がるもの。
十	ゆっくり深く按じて痛むもの。
±	ゆっくり深く按じて気持ちよいもの。
一	ゆっくり深く按じて痛みのないもの。

図1 治打撲一方の圧痛点

初 診: [黒塗り]

主 訴: 両ふくらはぎ, 右肩の痛み

現病歴: 6月より8月初旬までヨーロッパにおいて, 帰りにフィレンツェを廻り, 12時間冷房の効いた列車に乗り, さらに成田への飛行機に乗りふくらはぎが板のようになり, 整形外科で骨粗鬆症といわれ, 内科的に異常なしといわれ, 漢方治療をすすめられて来院。

来院時所見: 体格中等度, 全身倦怠感, 食思不振があり, ふくらはぎの痛みの他に, 腰, 背中, 肩へと痛みが移動し, 右半身の痛みが特に強い。舌は湿った白苔軽度, 腹力中等度よりやや軟, 臍に動悸と圧痛あり, 臍右斜め下2横指に圧痛(+), 臍下不仁(+), ふくらはぎの圧痛著明。血液検査, 尿検査に異常所見なし。

経 過: ツムラ補中益気湯エキス4gを朝に, 小太郎九味杞榔湯エキス4gを夕に服用。

2週間後, ふくらはぎの痛みはとれたが, 寒いと腰から下肢に神経痛様の痛みが走るというの

表 2

症例	年齢	性	主 訴	打 撲 歴	圧 痛			剤 型	加 減	併 用 薬
					治療前	治療後	消退日数			
1	54	女	左膝の痛み	4 か月前 (左膝)	+	+	7	煎	白川附子 1 g	
2	56	女	右肩、腕の痛み	1 年前 (腰)	+	+	42	"	"	
3	69	女	右肩、両ふくらはぎの痛み	5 年前 (右足甲)	+	-	140	"	"	
4	34	女	右背、右股関節の痛み	20 年前 (腕)	+	+	7	"	"	
5	24	女	腰痛	2 か月前 (右腕、腰)	+	+	7	"	"	
6	52	女	左足首の痛み	27 年前 (左足首)	+	+	70	"	"	
7	68	女	両膝の痛み	40 年前 (右膝)	+	+	84	"	"	
8	54	女	足の裏のシビレ感	5 か月前 (足背)	+	-	14	"	"	
9	59	女	右足の裏のシビレ感	9 か月前 (右下肢)	+	+	21	エキス剤 7 g	加工附子 1 g	
10	54	女	右頬、右眉の痛み	1 か月前 (右顔面)	+	-	126	"	"	
11	39	女	右足のひきつれ、左腰痛	1 年前 (ギックリ腰 3 回)	+	+	28	"	"	
12	53	女	右下肢シビレ、膝の痛み、 右手むくみ	10 年前 (右腎部)	+	-	28	"	"	桂枝加朮附湯
13	66	女	左 Ⅲ 指の痛み	24 年前 (左手)	+	-	56	"	" 0.5 g	麻黄附子細辛湯
14	48	女	偏頭部痛、耳鳴り	4 年前 (右側頭部)	+	頭痛 - 耳鳴り +	14 140	"	"	釣藤散 4 g
15	70	女	右足首の痛み	15 年前 (右足首)	+	+	28	"	"	柴胡桂枝湯 4 g
16	75	男	頸項強ばり、後頭部痛	6 年前 (両下顎脱臼 4 ~ 5 回)	+	-	7	"	" 1 g	八味丸、補中益気湯
17	72	女	首から背中の痛み、腰痛	1 年前 (腰)	+	+	42	"	" 7 g	
18	71	女	首と肩の痛み	7 日前 (顔)	-	+		"	"	
				44 日前	+	+	20	"	" 7 g	真武湯 7 g

で、各々にサンワ加工附子 0.5g ずつ加えた。

4週間後、変りないというので問診をとりなすと、5年前右足の甲につけもの石を落し治療を受けたことがある。腹部で、臍右横2横指に上方へ放散する圧痛(++)が認められ、治打撲一方加附子1gを煎剤で投与。治打撲一方を投与してから2週間後、身が軽くなり、神経痛も殆んどなく、圧痛(+)。

140日後には楽に歩けるようになり、人生バラ色になったといい圧痛(-)となっていた。

症例3:71歳 女

初 診: [REDACTED]

主 訴: 首と肩の痛み

現病歴: [REDACTED]めまいで来院。ツムラ真武湯を7gを処方。[REDACTED]来院し、[REDACTED]に自転車がぶつかってきて前へころび右頬を打ち、翌日、頬首、肩が痛く、病院に行き検査を受け異常なしといわれた。

[REDACTED]の来院時所見: 体格中等度、脈沈。舌湿って無苔、腹力軟、圧痛(-)、整形外科の薬があるからというのでツムラ真武湯7gのみ処方。

[REDACTED]、首と肩の痛みがとれないと来院。臍右横2横指に圧痛(+)、ツムラ治打撲一方7gを処方。

[REDACTED]首と肩の痛み消失し圧痛(±)となった。

考 案

全症例ともに共通して臍右横1~2横指辺りに放散する圧痛と抵抗を認め、症状の改善又は消退により圧痛も軽減または消失した。

打撲歴10年以上のものでは、主訴の痛みが打撲した部位と一致するか、あるいは打撲した部分と関係があると思われる部位に起こっているものが多く、いずれも整形外科でレントゲン写真に異常所見が認められていない。

打撲歴の新しいものでは、打撲傷と主訴の部位は必ずしも一致していないものが認められる。このようなことが何故起こるのか、因果関係は不明である。

打撲傷を受けた後、どの位経過して臍傍に圧痛

が出現するのかは、症例3においては、受傷後7日目には症状はあっても圧痛は認められず、44日目に来院した時に圧痛が認められていた以外、他の治験がないので詳しくは不明である。また、20年以上前の打撲歴の場合も圧痛が認められたが、この圧痛がいつ頃から出現したものかは全く不明である。

受診者18名中男性が1名であった。女性のほうが瘀血の圧痛が出やすいのであろうか。圧痛の出現とどのような関係を持つのか興味のあるところである。

打撲傷により瘀血が生じることは古くから知られているが、打撲後、瘀血を取り除くことなく放置することにより、瘀血を生じやすい体質の者には瘀血となって圧痛が現われるのであろうか。何故圧痛が臍右横に出現しやすいのか、これは桂枝茯苓丸や桃核承気湯の圧痛が何故あるのかというのと同じで、私にはわからない。

石原明氏によれば、本方は戦国時代の軍医たちが考案、経験して秘伝としていたものを香川修庵がまとめあげて創方したものとされている²⁾ 浅田宗伯の『勿誤藥室方函口訣』によれば³⁾「此方ハ 能ク打撲 筋骨疼痛ヲ治ス。萍蓬 ハ一名川骨 血分ヲ和ス。打撲 骨疼ヲ去ル 故ニ 二味ヲ以ッテ主薬トス。本邦血分ノ薬多ク 川骨ヲ主トスル者 亦此ノ意ナリ。日ヲ経テ愈エザル者附子ヲ加フルハ 此ノ品能ク温経スルガ故ナリ」

萍蓬 檳榔 川芎 桂枝 大黃 丁香 甘草 右七味 久しき者は附子を加うとあり、打撲に使われる。

受傷直後には、急性瘀血証とみて、桂枝茯苓丸や桃核承気湯など使われることは周知のことであるが、このような処置がなされなかった場合には、季節の変り目などに神経痛様の痛みを発する場合が多い。私の経験した18例も、打撲後漢方治療のされなかったもので痛みを発し、あちこちで治療を受けても効なく来院されたものばかりであった。

古くから受傷直後に駆瘀血剤で処置する方法がとられていることから考えて、駆瘀血剤の投与のなかったものでは、年月を経るにしたがって瘀血

の症状が現われるとも考えられる。

今回18症例に共通して臍右横1～2横指に放散する圧痛と抵抗が認められたが、うなづけなくもない気がする。先人にこのような圧痛を云った者はおらず、私は治打撲一方に認められる圧痛とみてよいのではないかと思う。

結 語

打撲の既往のあるものに共通して、臍右横1～2横指附近に放散する圧痛と抵抗を認めた。その他の部分に圧痛は認められなかった。例え認められたとしても、その痛みは比較にならないほどわずかなものであった。

本湯の投与により、圧痛の消退または軽減を認

めると同時に、症状の消失または改善を認めた。

これを治打撲一方の圧痛点と決めてよいかどうか、皆様の御追試・検討を戴ければ幸いと思う。

謝辞 この発表にあたり御校閲戴きました藤平健先生に深謝いたします。なお本稿の要旨は第43回東洋医学会で発表した。

文 献

- 1) 高木嘉子：漢方の臨床, p.32, 第37巻第10号, 1990
- 2) 石原 明：入門現代漢方, p.322, 立風書房, 1972
- 3) 長谷川弥人：勿誤薬室方函口訣釈義, p.161, 創元社, 1985

要旨 治打撲一方は、香川修庵により創方された処方であるといわれ、打撲、捻挫、疼痛等に用いられる薬方である。打撲直後より、数日経たものに用いる場合が多い。打撲や捻挫の既往のあるもの18例に、臍右横1～2横指附近に放散する圧痛と抵抗を認め、本湯の服用により症状の改善・軽減とともに、圧痛・抵抗の軽減または消退を認めた。また1例ではあるが、打撲の新しいものでは、圧痛・抵抗は認められず、日を経ってから出現していた。既往の古いもの、40年経過しているものにも、圧痛と抵抗を認め、本湯の服用により、症状も圧痛、抵抗も消退した。

打撲歴と、圧痛抵抗を目標に投薬して著効を得たことから、治打撲一方の腹候の一つとして有効性があると思われるので報告したいと思う。